

# 『万葉集』の仮名表記

——表意性を有する例を中心に——

奥田俊博

仮名表記は、一般に、用字が有するところの音、または用字に対応した和語の訓みをもつばら表す表記形式として理解される。この表記形式は、用字が担う意味を捨象することによって成り立ち、その点で、書き表される語の訓みのみでなく意味をも表す訓字表記とは対照的である。これを表記する行為の側から見た場合、使用される仮名は、おおよそ意味の無化された状態が期待されているといえよう。だが、その一方で、無化された状態を前提にしながら、そこから、用字が担う意味を改めて喚起させるような表記もなされた。『万葉集』には、訓字主体表記巻（巻一〜巻四、巻六〜巻十三、巻十六、巻十九）を中心に、かような表意性を有する仮名が少なからず存する。

『万葉集』における表意性を有する仮名の用法は多岐に互るといえるが、これらの例に対して類型化を試みるならば、ひとまず、語義に対する意識を反映した仮名と、歌中の用字と意味的に対応する仮名の二つの類型を析出することができよう。この二つの類型のうち、語義に対する意識を反映した仮名には、

① 黒牛の海紅丹穂<sup>ニホフ</sup>経もしきの大宮人しあさりすらしも

（巻七・二二八、藤原房前か）

② ……鶏<sup>ニケ</sup>が鳴く 東の国の 御軍士<sup>ミイクサ</sup>を 召したまひて 千磐<sup>チハ</sup>破<sup>ハ</sup> 人を和せと まつろはぬ 国を治めと 皇子ながら 任<sup>マ</sup>けたまへば……

（巻二・一九九、柿本人麻呂）

③ 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際にい  
隠るまで 道の隈 い積もるまでに つばらにも 見つつ  
行かむを しばしばも 見放けむ山を 心なく 雲の 隠<sup>カク</sup>  
障<sup>サザ</sup>べしや

（巻一・一七、額田王）

の①「丹穂」②「千磐破」③「障」などが挙げられる。「丹穂」「千磐破」「障」は借訓字であるけれども、知られるように、それぞれ「ニホフ」「チハヤブル」「カクサフ」の語義に対する意識をも反映した表記になっている。①「丹穂」は、その文字列から、丹色の穂の意を表し、それは、「ニホフ」の照り輝くという語義に関連して、一つの具体を呈示する。②「千磐破」は、「チハヤブル」の語義を、千の磐を破壊するという具体的な動作として捉えており、③「障」は、対象への接触を阻まれた者の視点から「カクサフ」の語義を説明する。これらの仮名から窺

える語義への理解は、具体的、解説的である。また、その表記は、語の全体、ないし一部の訓を表し、前後の文脈の表記にまで跨ることはない。語の内部に留まっているその仮名は、一般性を獲得しやすい表記としてあつたと考えられる。たとえば、「ニホフ」の「ニホ」を「丹穂」で表記する例には、「丹穂日手有者」(巻八・一六二九、大伴家持)、「紅丹穂経」(巻十三・三二二七)などが存し、「チハヤブル」も、「千磐破 神曾著常云」(巻二・一〇一、大伴安麻呂)、「千磐破 神之社尔」(巻四・五五八、土師水道)などが挙げられる。

次に、歌中の用字と意味的に対応する仮名は、大きく分けてさらに二つの型が認められる。一つは、

④百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きに鷓鴣鳴

(巻八・一四三二、山部赤人の結句にある「鷓」「鷓」のように類として対応する仮名である。これは、井手至氏『萬葉集全注 巻第八』が注を付しているように、歌の題材の鶯と関わらせて、借音字「鷓」「鷓」と借訓字「鷓」とを意識的に続けた表記と解し得る。「鷓」「鷓」

「鷓」は、仮名であるが、第四句の訓字「鷓」と同じ鳥類に属し、互いに類の関係を成す。かような類の関係を成す仮名の例には、

⑤印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くしあれば家し小篠

の「小篠」や、

⑥やすみしし 我が大君の 聞こし食す 天の下に 国はし  
も 沢にあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の

国の 花散らふ 秋津の野辺に……

(巻一・三六、柿本人麻呂の「沢」などが見え、⑤「小篠」は第二句の訓字「浅茅」と、⑥「沢」は次の句にある訓字「山川」の「川」と対応する。

歌中の用字と意味的に対応する仮名には、類として対応する仮名とともに、主体、動作、対象、手段など、出来事を構成する要素として対応する仮名の例も多い。

⑦衣手の真若の浦の愛子地間なく時なし我が怨ふら鏝

(巻十二・三一六八)

⑧秋山の舌日が下に鳴鳥の声だに聞かば何か嘆かむ

(巻十・二二三九、柿本人麻呂歌集)

⑦の結句の「鏝」は、耕すという動作において、第三句の訓字「地」との間に、〈手段―対象〉の関係が認められ、つづく⑧の第二句の「舌」は、第三句の訓字「鳴」の表す動作に対して手段を示す。⑦「鏝」⑧「舌」は、ともに出来事を構成する要素として表意性を有するといえよう。

右の④⑦⑧では、歌中の訓字と意味的に対応する仮名を中心に掲げた。もちろん、仮名同士が意味的に対応する場合も存し、

⑨常ならぬ人国山の秋津野のかきつはた駕夢に見し鴨

(巻七・一三四五)

⑩……こと酒ば 国に放け菅 こと放けば 家に放けなむ……

(巻十三・三三四六)

などが挙げられる。⑨の借訓字「駕」「鴨」は類として対応し、⑩の借訓字「酒」「菅」は、〈対象―動作〉の関係にある。また、中には、

⑪燈のかけに蚊蛾よふ虚蟬の妹蛾笑まひし面影に見ゆ

(巻十一・二六四二)

のように、類として対応する仮名が出来事を構成する要素となる例も見える。⑪の歌中で用いられている「蚊」「蛾」「蟬」は、「燈火に集まる虫の名を意識的に並べた用字」(『日本古典文学全集 萬葉集三』)と理解される。これらの仮名は、互いに類として対応すると同時に、初句の訓字「燈」との間に、燈火に集まるという動作における「主体―対象」の関係が認められる。

『万葉集』における表意性を有する仮名には、語義に対する意識を反映した仮名や歌中の用字と意味的に対応する仮名を類型として析出し得るが、さらに、歌の内容に対応する仮名の例も『万葉集』には存する。

⑫ 一日には千重にしくしく我が恋ふる妹があたりに為暮降る  
見ゆ (巻十・二二三四、柿本人麻呂歌集)

⑫の結句にある「為暮」について、内田賢徳氏「漢字表現の応用と内化」(『萬葉集研究 第二十一集』)は、借訓字「為暮」の表象する意味が歌の含意を表すと解する。「為暮」の表記から喚起される、暮れようとする、の意が、千々に心砕いて恋人を思慕しつつ日中を過ぐす、という歌に表現される時間の流れと関連する。それは、時雨の降る時刻が夕刻であることを示唆するであろう。同様の例としては、大伴坂上大嬢の大伴家持への贈歌、

⑬ 春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも念  
(巻四・七三五)

の結句にある「念」が挙げられる。⑬の「念」は、稻岡耕二氏『萬葉表記論』(第三篇第三章)が考察するように、借音字であり

ながら、同時に「オモフ」の意をも表す表記として捉えるのが適切であろう。『万葉集』において、「ネム(寝む)」を「念」の字によつて表記する例は当面例のみであり、また、「ヒトリカモネム」は、

我が恋ふる妹に逢はさず玉の浦に衣片敷き一鴨將<sup>ヒトリカモ</sup>寐<sup>ネム</sup>

(巻九・一六九二、柿本人麻呂歌集)

沫雪の庭に降り敷き寒き夜を手枕まかず一香聞將<sup>ヒトリカモ</sup>寐<sup>ネム</sup>

(巻八・一六六三、大伴家持)

など、表現として慣用化し、いざれも、恋する人と夜を共にすることができないという状況を踏まえて用いられる。⑬の「ヒトリカモネム」も、相手が不在であるという状況を踏まえた表現と考えられ、「念」の表記によつて、夜を共に過ぐせたらと願う相手である家持に対する大嬢の思慕の念を表象していると把握される。

『万葉集』における表意性を有する仮名に関しては、すでに少なからぬ例が指摘されており、今後においても新たな例を見出すことが課題になることは言うまでもない。だが、その一方で、すでに指摘された表意性を有する仮名の中には、なお検討の余地が残されている例も見える。また、歌の内容に対応する仮名の例として⑫「為暮」⑬「念」を掲げたが、全体を通過してみれば、表記と歌の内容との対応のありようは個別的な様相を呈する。語義に対する意識を反映した仮名や歌中の用字と意味的に対応する仮名については、類型化が比較的容易であるのに対し、歌の内容に対応する仮名は用法に幅が認められる。その表記の性質は、表意性を有する仮名全体の中で問われてよ

いであろう。この追究は、語義に対する意識を反映した仮名や歌中の用字と意味的に対応する仮名が有する表記の性質をより明確にすることに繋絡するものと考えられる。以下、歌の内容に対応する仮名を中心に、他の表意性を有する仮名の用法と對比させながら表記の性質を検討し、さらに、表意性を有する仮名全体が有する表現性について考察を試みたい。

## 二

歌の内容に対応する仮名が有する表記の性質を検討するにあたり、まず留意されるのは、語義に対する意識を反映した仮名との関係の親密さであろう。①「丹穂」②「千磐破」③「障」が表す意味は、それぞれ「ニホフ」「チハヤブル」「カクサフ」の語義に対して具体的な様相を呈示しており、一方、⑩「為暮」⑪「念」も、歌の表現に関連して具体性を付与する。両者は、仮名の表す意味の関わる表現が語の内部に留まるか否かによってひとまず区別されるが、その一方で、連続的な側面を有しており、中には、

⑭ 大きな海の水底照らし石著玉斎ひて取らむ風な吹きそね

(巻七・一三一九)

の「石著」のような表意性を有する仮名の例も存する。「シツク」については、

藤波の影なす海の底清み之都久石をも玉とぞ我が見る

(巻十九・四一九九、大伴家持)

水底に沈白玉誰がゆゑに心尽くして我が思はなくに

(巻七・一三二〇)

などの例が見え、それは、玉や石が水底に沈む意を表す。「石著」は、如上の語義に鑑みて、借訓字と位置付けし得る。だが、『万葉集』において、「石」は「石灑」(巻七・一三八八)、「石触」(巻十一・二七二六)など、「イハ」の表記として用いられ、また、岩場での玉の採取を詠んだ歌として、

海神の手に巻き持てる玉ゆゑに石の浦廻に潜さずするかも

(巻七・一三〇一、柿本人麻呂歌集)

見渡せば近きものから石隠りかがよふ玉を取らずは止まじ

(巻六・九五二、笠金村か)

が存する。⑭「石著」は岩に付着する意を表し、第二・第三句「水底照らしづく玉」の表現に関連して、海底を広く照らしながら岩場に沈んでいる状態を表象していると理解される。ただし、⑩「為暮」⑪「念」の表す意味が歌全体の内容に関連していたのに対し、「石著」の表す意味が関連するのは、「水底照らしづく玉」という歌の一部の表現である。「石著」は、歌の内容に対応する仮名と看做すのが妥当であるけれども、仮名の表す意味が関わる表現の短さにおいて「丹穂」「千磐破」に親近するといえよう。

歌の内容に対応する仮名と語義に対する意識を反映した仮名には、上述したような連続性が窺えるけれども、両者の間には使用の頻度に差が存する。「丹穂」「千磐破」は、「ニホフ」「チハヤブル」の表記に多く使用され、一方、「シグレ」「ネム」「シツク」が「為暮」「念」「石著」と表記される例は他に見出し難い。それは、語義に対する意識を反映した仮名が、その語の使用に対応して表記として的一般性を獲得しやすいのに対し、歌

の内容に対応する仮名は、歌の表現内容に即しているために使用が制限されたからだと考えられる。実際、歌の内容に対応する仮名の多くは、その使用が個別的であり、かつ一回的である。かような性質を有する歌の内容に対応する仮名は、語義に対する意識を反映した仮名に比して、用法に広がり認められる。語義に対する意識を反映した仮名は、「丹穂」「千磐破」のように、個々の用字が担う意味を連続させることによつてまとまりのある意味を表す傾向にある。歌の内容に対応する仮名においても、「為暮」に代表されるように同様の傾向が看取されるが、中には、「四時」「匍匐」といった熟字を利用した仮名の例も見える。

⑮ 滝の上の 三船の山に みづ枝さし 四時シツ生ひたる 梅の木ツバキの いや継ぎ継ぎに…… (巻六・九〇七、笠金村)

⑯ の歌の第四句にある「四時尔」は、びつしりと、すぎ間なく、の意の副詞「シジニ」の借音字であり、そのうちの「四時」は、吉井巖「萬葉集全注 巻第六」が注するように、梅が常緑喬木であることと関連した表記として理解される。漢語において、「四時」は、

天有「四時」、春秋冬夏、風雨霜露、無「非」教也 (『礼記』孔子問居 第二十九)

などの例が存し、枚挙にいとまがない。右の「四時」は、春夏秋冬の四季を指す。下つて、六朝期には、四季を指す例とともに、

孀居憎「四時」、況在「秋閨内」

(梁・江洪「秋風二首」其一、「玉台新詠」卷十)

相去三千里、參差書信難、四時無「人」見、誰復重「羅紉」

(梁・吳均「閨怨詩」、『芸文類聚』人部十六、閨情) など、四季のいずれも、の意を担う例も見える。⑮「四時」は、長歌冒頭に詠まれた梅の木と関連して、四季のいずれも、の意を表すと解してよいであろう。冒頭の五句は、実景に即した表現であるとともに、「いや継ぎ継ぎに」を起す序でもある。序詞と序詞連接部とは、「トガ」「ツギ」の類音によつて結ばれていると同時に、「四時」によつて喚起される、梅の木が常緑樹であるという属性も、時の継続を表す点で、序詞連接部「いや継ぎ継ぎに」との間に比喩的な連繋を有する。

⑮「四時」と同様のことは、「哀「弟」死去」作歌一首并短歌」(巻九・一八〇四〜一八〇六、田辺福麻呂歌集)の長歌、

⑯ ……遠つ国 黄泉の界に 延ふつたの「己」が向き向き 天雲の 別れし行けば 闇夜なす 思い迷匍匐 射ゆ鹿の 心を痛み 葦垣の 思ひ乱れて 春鳥の 音のみ泣きつつ あぢさはふ 夜昼知らず かぎろひの 心燃えつつ 嘆き別れぬ (一八〇四)

の「匍匐」についてもいえよう。⑯では、弟の死去が詠まれた後、「闇夜なす」以下、葬送に至るまでの悲嘆が描かれる。その悲嘆の表現の中で使用される「匍匐」は、動詞「マトハフ」の一部を表記したものであり、借訓字と位置付けし得る。『万葉集』において、「匍匐」は、

みどり子の匍匐たもとほり朝夕に音のみぞ我が泣く君なしにして (巻三・四五八、余明軍)

のように、熟字訓として用いられる例が見える。大伴旅人の死

に際し、資人余明軍が詠んだ歌であり、第二句「匍匍たもとほり」は、旅人の死を悲しむ行為として把握される。この余明軍の歌の「匍匍」を理解するにあたって、ただちに想起されるのは次の「匍匍」の例であろう。

孝子親死、悲哀志慙、故匍匍而哭之、若將復生然

(『礼記・問喪 第三十五』)

右は、親が死去した際の孝子の行動を叙した箇所である。この「匍匍」について、鄭玄は、「匍匍、猶顛蹶」と注を付す。「顛蹶」は、身をかがめるの意。親を失い、悲しみで心がもたえるために「匍匍」の行為がなされる。『日本書紀』においても、

于時伊弉諾尊恨之曰、唯以一兒替我愛之妹乎、則匍匍頭辺匍匍脚辺而哭泣流涕焉

(神代上)

の例が存し、この「匍匍」などは、『礼記』の「匍匍」を踏まえた用法と認められる。だとすれば、余明軍の歌の「匍匍」はもとより、⑯の「匍匍」についても、かような用法を念頭に置いた表記と見て差し支えなからう。その表記は、弟を失った悲嘆を含意したものと考えられる。

歌の内容に対応する仮名の用法の広がり、次に掲げる、前後の訓字と相俟つて文脈を成すような用法にも窺える。

⑰ますらをと思へる我をかくばかりみつれにみつれ片念男責

(巻四・七一九、大伴家持)

⑱ふるさとの明日香はあれどあをによし奈良の明日香を見染思好も

(巻六・九九二、大伴坂上郎女)

⑲の結句にある借訓字「男責」は、澤瀉久孝『萬葉集注釈』が「意識してかうした文字を使ったものと思はれる」と述べ、

さらに、『日本古典文学全集 萬葉集一』は、「男のくせに女々しく片恋に悩む自らのふがいなさを責める気持ちを反映する」と解する。「男責」と訓字「片念」とを合わせた「片念男責」の文字列は、上二句「ますらをと思へる我を」の内容と関連しつつ、片恋の男を責める、という意を表す。つづく⑳の結句の借音字「楽思」も、前後の訓字「見」「好」と相俟つて、見ること楽しく、思ふこと好し、の意を表している(佐佐木隆氏『万葉集』における歌意と文字との交渉―後者相宿友をめぐって―)、「国語学」第11集。それは、第三・第四句の「あをによし奈良の明日香」を対象として一つづきの文脈を形成する。

熟字を利用した仮名や、前後の訓字と相俟つて文脈を成す仮名といった用法は、語義に対する意識を反映した仮名には一般的でない。歌の内容に対応する仮名に窺えるこれらの用法は、仮名が使用される範囲の広さに起因すると見てよいであろう。語義に対する意識を反映した仮名においては、仮名の使用が語の内部に留まっているのに対し、歌の内容に対応する仮名は、特定の表現に限定されることがなく用いることが可能である。この仮名の使用される範囲の広さが、熟字を利用した仮名などの用法を可能にしたと推察される。

### 三

語義に対する意識を反映した仮名においては、先述したように、仮名の表す意味は、具体的、解説的であるのが通例であった。歌の内容に対応する仮名もおおよそ同様であるといえるが、中には表す意味がさらに比喩として機能している例が見える。

①秋風に大和へ越ゆる雁がねは射矢遠ざかる雲隠りつつ

(巻十・二二二八)

⑬の歌の第四句にある「射矢」については、高木市之助「変字法に就て」(「吉野の鮎」)が、「雁が忽ちにして雲隠れ去る意味を強く認識する事が出来」と指摘する。「射矢」が速さを表象する可能性は、もとより否定できないけれども、『万葉集』に見える矢に關しての表現に鑑みるならば、「射矢」が表象するのは、遠くまで飛ぶ動作であろう。「慕振勇士之名」歌一首并短歌(巻十九・四一六四)四一六五、大伴家持の長歌には次のような表現が見える。

…梓弓 未振り起こし 投矢持ち 千尋射渡し 劍大刀  
腰に取り佩き あしひきの 八つ峰踏み越え…

(四一六四)

右の長歌の「投矢持ち 千尋射渡し」は、「梓弓 未振り起こし」「劍大刀 腰に取り佩き」などとともに、ますらおの勇姿の表現としてある。「投矢持ち 千尋射渡し」の行為者はますらおであり、矢が常に遠くまで射られるという一般性は認め難いけれども、この表現に窺える矢とそれが遠くまで射られることとの関係はなお留意されよう。この関係は、枕詞・被枕詞の表現にも見られ、その例として、

…遠ざかり居て 思ふそら 安けなくに 嘆  
くそら 安けなくに 衣こそば それ破れぬれば 継ぎつ  
つも またも合ふといへ 玉こそば 緒の絶えぬれば く  
くりつつ またも合ふといへ またも逢はぬものは 妻に  
しありけり

(巻十三・三三三〇)

の「投ぐるさの 遠ざかり」が挙げられる。妻との死別を詠んだ右の挽歌では、手投げ矢の類を指すと解されている。「投ぐるさ」が、「遠ざかり」の比喩の枕詞として用いられる。被枕詞以下の文脈において、「遠ざかり居て」は、妻と死別した状態にあることを意味するが、枕詞・被枕詞の關係に即するならば、「投ぐるさの 遠ざかり」は、矢とそれが遠くまで射られることとの關係の緊密さの上に成り立つ。これらの表現に鑑みて、⑬「射矢」は、次句の「遠ざかり」に關連した仮名と解するのが妥当なのではあるまいか。すなわち、「射矢」は、射る矢の意を表し、さらに、それは雁の遠くに飛び去る動作の比喩として理解される。

仮名から喚起される意味が比喩として機能する例は、⑬「射矢」の他に、

⑭浅茅原刈り標さして空言も寄そりし君が言鴛鴦待たむ

(巻十一・二七五五)

⑯我が岡のおかみに言ひて降らしめし雪のくだけしそこに塵  
けむ

(巻二・一〇四、藤原夫人)

の「鴛鴦」や「塵」を指摘し得る。⑯「鴛鴦」は、助詞「ラシ」の借訓字であるけれども、鳥類の「ラシ」の有する表象とも關連する。鳥類の「ラシ」については、

乎之の住む君がこの山齋今日見ればあしびの花も咲きにけ  
るかも

(巻二十・四五一、三形王)

人漕がずあらくも著し潜きする鴛とたかべと船の上に住む

(巻三・二五八、鴨足人)

など、「ラシ」それ自体が詠まれる例も存するが、⑯「鴛鴦」を

理解する上で看過し得ないのは、佐佐木隆氏前掲論文が指摘した、

山川に烏志ツシ二つ居て偶なぐひよく偶なぐへる妹を誰か率にけむ

（『日本書紀』孝德天皇、大化五年三月）

の「ヲシ」である。この「ヲシ」は、宮体詩における「鴛鴦」の表現を踏まえていると考えられ（内田賢徳氏「孝德紀挽歌二首の構成と発想―東信詩との関連を中心に―」、『萬葉』第百三十八号）、男女二人の睦まじさの比喩と解し得る。⑳「鴛鴦」も、宮体詩の「鴛鴦」の表現に基づく比喩と看做して差し支えなからう。「鴛鴦」は、男女が親しい関係にあると噂される意の「寄そる」のみならず、作者が待っている君の「言」、および、作者の心情とも関わる。㉑の歌の「言」は、「君のあはんといふ言」（橋千蔭『萬葉集略解』）と解されるような睦まじい男女の関係の実現を促す言葉と捉えられ、しかも、それが「空言」だとしても、作者が待ち望む言葉としてある。二人の睦まじい関係は、第三者の噂として語られるとともに、作者によつて期待される関係でもあるといえる。

つづく、㉒の歌の結句にある借訓字「塵」については、稲岡耕二氏『萬葉集全注 卷第二』が、「塵」の字が持つ表意性を利用して指摘し、さらに、「万葉集名歌事典―万葉名歌百首（平館英子氏執筆）」（稲岡耕二氏編『万葉集事典』学燈社）では、「塵」を「散」の借訓に使うことは、雪との関連において「玉塵」の語（梁・何遜「和言馬博士詠雪詩」など）を思わせる」と述べる。㉓「塵」は、表意性を有する仮名として雪との関連において理解すべきだと考えられる。ただし、「玉塵」は、一般に、

又綺里丹法、先飛取五石玉塵、合以丹砂汞、内大銅器中煮之、百日五色、服之不<sub>レ</sub>死

（『抱朴子』内篇、卷四、金丹）

若夫洗精服食、慕道遊仙、尋玉塵於万里、守金竈於千年、三尸可度九転難<sub>レ</sub>伝

（梁・何遜「七召」、『文苑英華』卷三五二）

など、丹薬の原料となる玉の粉末を意味する。『抱朴子』では、これに丹砂、汞を混ぜ、大きな銅器に入れて百日煮ると五色の丹薬になる由が記され、また、「七召」では、「玉塵」を金竈の中に千年置けば、その出来上がった丹薬は、三尸虫が体内から出て行き、九転丹が後世に伝え難くなるほどの効力を持つとある。平館氏の掲げられる何遜の詩の、

凝階似<sub>二</sub>月夜<sub>一</sub>、弘樹曉疑<sub>二</sub>春<sub>一</sub>、蕭散忽如<sub>レ</sub>尽、徘徊已復新、若逐<sub>二</sub>微風<sub>一</sub>起、誰言<sub>二</sub>非<sub>二</sub>玉塵<sub>一</sub>（『詠雪詩』、『芸文類聚』天部下、雪）

の「玉塵」も、玉の粉末の意に解するのが自然であろう。右の詩においては、降り積もつた雪が微風によつて舞い上がる様子を「玉塵」に喩えたと理解される。かような意を担う「玉塵」を「塵」とのみ記した例を見出し難いことも考慮するならば、ここでは、「塵」の字に即した検討が必要となる。

「塵」は、後漢・許慎『説文解字』に「鹿行揚<sub>二</sub>土也<sub>一</sub>」とあり、段玉裁『説文解字注』は、「群行則揚<sub>二</sub>土甚<sub>一</sub>、引伸為<sub>二</sub>凡揚<sub>二</sub>土之<sub>一</sub>儁<sub>一</sub>」と注する。また、

子之宅近<sub>二</sub>市<sub>一</sub>、湫隘囂塵、不可<sub>二</sub>以居<sub>一</sub>

（『春秋左氏伝』昭公三年、伝）

の杜預注は、「塵、土」とし、『篆隸万象名義』にも、「雉珍反、



土也」とある。「塵」は、土、とりわけ土ほこりを意味すると考  
えられる。土ほこりの意の「塵」は、舞い上がるもの、飛ぶも  
の、という表象を有しており、

日落唱歌還、塵飛車馬度

(梁・庾肩吾「長安路詩」、『芸文類聚』樂部二、樂府)

旆軋蒼龍闕、塵飛飲馬橋

(陳・江總「待宴玄武觀詩」、同右、居処部三、觀

など、「塵飛」の表現が多く見える。さらに、「塵」は、

入樓如霧上、弘馬似塵飛

(梁・孝元帝「詠細雨詩」、同右、天部下、雨

のように、細雨に濡れた馬の背を払ったときの水滴の比喩とし  
ても用いられた。⑭「塵」は、漢語「塵」の持つ表象を念頭に  
置いて表記したものと推測される。それは、第四句にある「雪  
のくだけ」の比喩であり、「塵」の軽やかに飛ぶという表象は、  
大原の里で降った雪のかけらが明日香の里に散ったという下二  
句の内容と意味的に関連する。

⑮「射矢」⑯「鴛鴦」⑰「塵」は、いずれも具体的な意味を

表し、その意味に内包される表象が、歌の表現に関連すること  
によって比喩として機能する。かような比喩となる用法も、語  
義に対する意識を反映した仮名には一般的でない。この現象は、  
歌の内容に対応する仮名が意味の面において広がりを見せたも  
のとして理解してよいであろう。

#### 四

歌の内容に対応する仮名は、表す意味が具体性を有する点で

語義に対する意識を反映した仮名と性質を同じくする。だが、  
歌の内容に対応する仮名は、語義に対する意識を反映した仮名  
と異なり、仮名の表す意味が語の内部に限定されることなく使  
用される。これと同様の差異は、語義に対する意識を反映した  
仮名と、歌中の用字と意味的に対応する仮名との間にも認めら  
れよう。つまり、歌の内容に対応する仮名と、歌中の用字と意  
味的に対応する仮名とは、仮名の表す意味が語の内部に限定さ  
れない点で共通した性質が窺える。この共通性は、両者の交渉  
を容易にさせる要因の一つになったであろう。表意性を有する  
仮名の中には、歌中の用字と意味的に対応しつつ、その対応す  
る意味が歌の内容にも関連する仮名の例が存する。

⑱佐保川の岸のつかさの少歴木な刈りそねありつつも張し来  
たらば立ち隠るがね (巻四・五二九、大伴坂上郎女)

⑳の歌の第五句にある「張」は、春の借訓字であるが、しか  
し、単なる借訓字として使用されているのではないと考えられ  
る。「万葉集」において、「張」は、一般に動詞「ハル」の訓字  
として用いられ、

山背の久世の鷲坂神代より春は張つつ秋は散りけり

(巻九・一七〇七、柿本人麻呂歌集)

春の日に張る柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ

(巻十九・四一四二、大伴家持)

などの例が存する。右の二例の「張」は、芽の出る意を担う。  
第二例では、柳が「張」の対象物であるけれども、第一例では  
樹木の種類は限られていない。また、二首ともに春が詠み込ま  
れる点は留意されてよい。㉒の歌も、第四句に「春し来たらば」

と詠まれており、「張」は、表意性を有する仮名と見てよいであろう。それは、歌中の訓字「小歴木」<sup>(8)</sup>と意味的に対応しており、出来事を構成する要素として、〈主体―動作〉の関係を成している。と同時に、「張」は、一首の内容にも関連しているといえよう。上三句の禁止表現に対して、下三句「ありつつも春し来たらば立ち隠るがね」はその目的を表す。「張」の表記は、柴を刈らずにそのままにしておいて、春になったら隠れることができるように、という下三句の内容に、柴の芽が出る、という具体的な状況を添えている。

②「張」と同種の用法と看做すことが可能な仮名には、

③春山の友鶯の鳴き別れ<sup>春</sup>ます間も思御我を

(巻十・一八九〇、柿本人麻呂歌集)

の第三句にある「眷」が挙げられる。「眷」は、『説文解字』が「顧也」とし、魏の張揖『広雅』(釈詁)も、「眷、奥、顧也」と解する。「眷」は「顧」と同じく、かえりみるの意を担うと捉えられるが、

眷<sup>三</sup>西路<sup>二</sup>而長懷、望<sup>三</sup>故郷<sup>二</sup>而延佇

(後漢・禰衡『鸚鵡賦』、『文選』卷十三)

遡<sup>三</sup>風於衡薄<sup>二</sup>、眷<sup>三</sup>椒塗於瑤壇<sup>二</sup>

(晉・張協『七命八首』、同右卷三十五)

などの例からも知られるように、単にかえりみる動作のみでなく、かえりみる対象への心引かれる心情を内含する例も少なくない。如上の「眷」の用法に鑑みて、③「眷」は、対象に思いを向けるという点で、結句の「思御」と類の関係にあると理解される。さらに、「眷」の表す意味は、第三・第四句「鳴き別れ

帰ります間も」と内容的に関連し、「かえりゆく間、絶えず思いを込めてかえりみをするような別れ」(内田賢徳氏「漢字表現の応用と内化」という解釈を導く。③「眷」は、訓字「思御」との間で類の関係を成しつつ、その関係において表す意味が第三・第四句の内容に具体的な状況を付与していると把握される。同じ借訓字である、

風をいたみ沖つ白波高からし海人の釣船浜に眷<sup>六</sup>ぬ

(巻三・二九四、角麻呂)

の「眷」と異なり、③「眷」が表意性を有する仮名として認識されるのは、第三・第四句の内容との関連とともに、「思御」との意味的な対応の与るところが大きいと考えられる。

歌中の用字と意味的に対応しつつ、対応する意味が歌の内容にも関連する仮名には、

④あらかじめ人言繁しかくしあらばしゑや我が背子奥<sup>オキ</sup>もいかに荒<sup>アヲ</sup>海藻

(巻四・六五九、大伴坂上郎女)

の「荒」のように、その表す意味が比喻として機能する例も存する。④の歌の結句にある「荒海藻」は、海藻「アラメ」の訓字「荒海藻」を、動詞「アリ」と助動詞「ム」から成る「アラメ」にあてた借訓字である。この「荒海藻」については、同じ結句にある「奥」の「縁語」として捉える解(『日本古典文学全集 萬葉集一』)が存するが、さらに、「奥」と「荒海藻」の「荒」とは、〈主体―動作〉の関係として意味的に対応するといえよう。「荒」は、「奥」との意味的な対応関係において、荒れるの意を表す。ここで思い合わされるのは、『万葉集』には、海の荒れることが比喻として詠まれる歌が見えることである。

風吹きて海は荒<sup>アルトモ</sup> 明日と言はば久しくあるべし君がまにまに  
(巻七・一三〇九、柿本人麻呂歌集)

右の歌は、譬喩歌に収められ、上二句「風吹きて海は荒る」と「は、男女二人の親密な関係に対する周囲の目の厳しさを喩えた表現として一般に理解される。また、同じ譬喩歌に属する、海<sup>アルトモ</sup>の底しづく白玉風吹きて海は雖<sup>アルトモ</sup>荒取らずは止まじ  
(巻七・一三二七)

の第三・第四句は、右の柿本人麻呂歌集歌と同句であるが、この二句では、これから親密な関係を結ぼうとする女性への周囲の監視が嚴重であることが喩えられている。これら二例より推して、⑳の「奥」と「荒」との意味的な対応も、同様の比喩と理解するのが適切であろう。それは、上二句「あらかじめ人言繁し」、結句「奥はいかにあらめ」の表現によつて悲観される、二人の親密な関係に対する周囲の目の厳しさの比喩として機能していると推察される。

以上、歌の内容に対応する仮名を中心に、表意性を有する仮名表記の性質について考察を試みた。歌の内容に対応する仮名は、表す意味が具体的であるという点で、語義に対する意識を反映した仮名と共通した性質を有する。だが、歌の内容に対応する仮名の中には、熟字を利用した仮名(㉑「四時」、㉒「匍匐」)や、前後の訓字と相俟つて表意性を有するような仮名(㉓「男責」、㉔「楽思」)が存し、語義に対する意識を反映した仮名には見られない用法の広がり認められた。広がりには意味の面にも及び、仮名の表す意味が比喩として機能する例(㉕「射矢」、㉖「鴛鴦」、㉗「塵」)が見える。また、歌の内容に対応する仮名と歌中の用

字と意味的に対応する仮名とは、仮名の表す意味が語の内部に限定されない点で性質を同じくし、中には、歌中の用字と意味的に対応しつつ、対応する意味が歌の内容にも関連する仮名(㉘「張」、㉙「眷」、㉚「荒」)が存する。

表意性を有する仮名を通覧してみるならば、類型としての中心は、語義に対する意識を反映した仮名と、歌中の用字と意味的に対応する仮名であるといえる。歌の内容に対応する仮名は、前者の用法と共通した基盤を有しており、仮名の表す意味が関わる表現の範囲の広さが用法の広がりをも可能にしたと捉えられる。とはいえ、歌の内容に対応する仮名においても、上述したような類型化が可能である点は看過し得ない。歌の内容に対応する仮名を含めた表意性を有する仮名に窺えるこれらの類型は、意味を無化した状態が期待される仮名に表意性を付与して伝達させようとする表記意識の現れと看做してよいのではあるまいか。表現が類型的であればあるほど、表意性を有する仮名による伝達は容易であるといえよう。だが、逆に、如上の類型に則っていない仮名から有意を汲み取ることは困難を伴ったであろう。とりわけ、ほとんどの表記が一回的である歌の内容に対応する仮名においては、それが類型的表現でない場合、程度の差は異なりこそすれ、恣意的な理解が伴いがちであったと推察される。

歌の内容に対応する仮名全体について言えば、その表現は、伝達可能な類型的な表現から伝達が容易でない個別的な表現へとゆるやかな連続を成していたと考えられる。もとより、語義に対する意識を反映した仮名や歌中の用字と意味的に対応する

仮名についても事情は同じであるが、前二者に比して、歌の内容に対応する仮名はより個別的な表現が志向される。個別的な表現への志向は、歌の表現内容が個別的であることと相關の關係にあり、類型的な表現の広がりもその志向の反映として位置付けし得る。

(平成十年五月六日稿、七月十四日補筆)

注

- (1) 「カクサフ」の「サフ」を「障」の字で表記する例には、③の他に「隠障浪」(巻十一・二四三七)が挙げられる。「カクサフ」の語例自体が少ないために傾向を把握し難いが、「カクサフ」を「隠障」と表記することも一般的であり得たのではないかと推測される。
  - (2) 「蚊」「蛾」「蟬」のうち、「蟬」は「虚」とともに「ウツセミ」の語義に対する意識を反映した仮名としても位置付けし得る。なお、⑤「小篠」も、借訓字「生」との間に「主体―動作」の關係が認められよう。
  - (3) なお「為春」については、内田賢徳氏「萬葉しぐれ考」(「ことばとことのは」第10集)をも参照。
  - (4) 主な先行研究としては、高木市之助「変字法に就て」(「吉野の鮎」)、吉澤義則「萬葉集に於ける文字の文法的用法に就て」(「国語国文」第三卷第一号)、井手至氏「掛け詞の源流」(「人文研究」第21卷第6分冊)、川端善明氏「万葉仮名の成立と展相」(「日本古代文化の探究 文字」)、社会思想社、佐佐木隆氏「万葉集」における歌意と文字との交渉―「後者相宿友」をめぐって―(「国語学」第三十三集、毛利正守氏「文字による文学」(中西進氏編「日本文学新史 古代I」至文堂、第八章)、山崎福之氏「万葉集における漢語と表記―文字表現をめぐって―」(「和漢比較文学叢書 第九卷 万葉集と漢文学」汲古書院)、先掲内田賢徳氏「漢字表現の応用と内化」などが存する。
  - (5) 「シツク」と「シツム」とは類義の關係にあるが、「シツム」には、「難波潟潮干なありそね沈にし妹が姿を見ま苦しも」(巻二・二二九、河辺宮人)のように、動作主体が人である例が見え、また、「古りにし
- 嬬ヌナにしてやかくばかり恋に將シツムし手童のごと」(巻二・二二九、石川女郎)のように「恋に沈む」といった転化された用法も存する。「シツク」に比して、「シツム」は、その用法に幅が存するといえよう。
  - (6) 「玉塵」が比喩として雪それ自体を指す早い例として、「瑤草生階墀、玉塵散庭闕」(盛唐・李白「淮海对雪贈仝鶴」)、「李太白文集」(巻八)が挙げられるが、用法として一般化するのには、中唐にまで下るようである。かような例として「漠漠復雰雰、東風散玉塵」(中唐・白居易「酬皇甫十早春对雪见贈」)、「白氏文集」卷六十七、「寒花带雪滴山腰、着柳冰珠满碧條、天色漸明回一望、玉塵随馬度藍橋」(中唐・元稹「西歸絕句十二首」其十二)、「元氏長慶集」卷十九)などが存する。
  - (7) ②の歌は、天武天皇の賜歌「我が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後」(巻二・一〇三)に和えた歌であり、賜歌の「大雪」に対して「雪のくだけ」と応ずるなど、藤原夫人の戯れの意が込められていると一般に解される。「雪のくだけ」の比喩である「塵」の表記は、その戯れを反映していると捉えることも可能であろう。
  - (8) 「少歴木」は、桂本、元曆校本、紀州本などの次点本が「ワカクヌギ」と訓んだのを、仙覚「萬葉集註釈」が「シバ」に改め、西本願寺本以下の新点本、および、賀茂真淵「萬葉考」以降の諸注が「シバ」と訓む。「歴木」は、くぬぎの意。天治本「新撰字鏡」(巻七)に、「櫪シバ」(中略)久奴木也」とあり、また、日本書紀「古訓点には、当荒陵松林之南道、忽生両歴木、挾路木合」(仁徳天皇五十八年五月、前田家藏本)、「爰天皇問之曰、是何樹也。有一老夫曰、是木者歴木也」(景行天皇十八年七月、北野本)のように「クヌギ」の訓の付される例が見える。「少歴木」の表記は他に例を見出し難いが、「任吉の出見の浜の柴莫阿曾尼」(巻七・二二四、柿本人麻呂歌集)の類句に鑑みて、「少歴木」は、小さなくぬぎのような木、の意で柴を解説的に表記した義訓と捉え、「シバ」と訓むのが適切であろう。
  - (9) さらに、「簪」には、「初簪苞緑篋、新浦含紫莖、海鷗戲春岸、天雞弄和風、無化心無厭、覽物眷彌重」(宋・謝靈運「於南山往

北山「経湖中」瞻眺一首」、「文選」卷二十二)のような用法も見える。謝靈運の詩の「眷」は、李善注に「眷、猶恋也」とあるように、属目する対象への愛しみの心情に重点が置かれている。この「眷」も、対象を視覚によって焦点化する行為と対象に引かれる心情とをともに表しており、その点で「鸚鵡賦」「七命八首」の「眷」の用法と連続していると理解できよう。

付記 本稿は、筑波大学国語国文学会第二十一回大会(平成九年九月二十七日)での研究発表を骨子とする。席上ならびに発表後、北原保雄先生、犬井善壽先生、三田誠司氏より、種々御教示をいただいた。また、稿を成すに際して、終始、芳賀紀雄先生の御指導を賜った。末尾ながら、ここに記し、深く感謝の意を表します。

(おくだ としひろ

筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科日本文学)